



一、弱さという〈萌えIIエロス〉

そのころ流沙河の河底に栖んでおつた妖怪の総数およそ一万三千、なかで、渠ばかり心弱きはなかつた。

「悟浄出世」の冒頭は、視点人物である沙悟浄の〈最弱〉宣言から始まる。語り手は、「流沙河」という共同体の「一万三千」という住民の中で、悟浄が一番心が弱いと認定したのだった。中島敦が「わが西遊記」シリーズにおいて、キャラクター小説としての『西遊記』の可能性に気づきながら、あえてヒーローキャラクターの「孫悟空」ではなく、原典において最も個性の弱い（キャラ立ちをしていない）

「沙悟浄」を視点人物に抜擢したのは、この最弱宣言と関係があるようだ。従来の解釈のように、悟浄を中島敦の自己投影（の一部）と見なすことは、本来は読者のあずかり知るところではない。おそらく、冒頭一文で読み手が心を掴まされる理由は、「心弱き」者に寄せる圧倒的な共感だ。

たとえば〈最強〉とは、ある社会共同体において認められる客観的な評価だといえるだろう。孫悟空のようなヒーローはこれに当たる。一方、〈最弱〉の方は、外部的な評価がなくとも、自虐的かつ内向的な自意識により自己認定できるものだ。「出世」では、その自慢にもならない負の宣言を、大胆にも冒頭の一文で大きく掲げたのだった。そこに、弱さを抱え持つ大半の読者たちが心を寄せる、いわば作品的〈萌え〉（エロス）が生まれるのである。

さらに語り手は、悟浄の心の弱さや内向的な生活を送る理由を明かしていく。悟浄たち妖怪の住む「流沙河」において、悟浄は自分が認識する自分（沙悟浄）と、妖怪たちが認識する自分（沙悟浄）とが、どうも噛み合っていないと感じていたのである。語り手は、悟浄と「他の妖怪ら」との認識の違いにまつわる二つのエピソードを語り、悟浄が感じるこの違和感が、実は根源的なものであることを読み取らせていく。そのエピソードの一つは、悟浄の身体にまつわる認識の齟齬だ。

渠に言はせると、自分は今までに九人の僧侶を啖つた罰で、それら九人の骸顛しやれこうべが自分の頸の周囲について離れないのださうだが、他の妖怪ばけものらには誰にもそんな骸顛は見えなかつた。

この箇所は従来、悟浄の病的な精神の発露や共同体からの疎外として読まれてきた。⁽¹⁾しかし、語り手はこの悟浄の自己認識を否定していない。この語り手の態度をどう考えるかで「悟浄出世」の読みは変わるだろう。すなわち、悟浄の考える「自分」は、九人も僧侶を殺害し喰らっており、「頸」から離れない「九人の骸顛」という〈業〉を背負った「世界」に生きている。しかし、「他の妖怪ばけものら」は「自分」とは異なる世界線に生きているゆえに、頸にかかる「九人の骸顛」が「見えなかつた」と証言するのである。だから、「誰もそれを見た者がない」と言われたとしても、それは悟浄の世界が否定されたことにはならない。「何故？」という謎となって残ってしまうのだ。

もう一つは、他の「妖怪ばけもの」サイドの事情だ。「流沙河」の河底に棲む妖怪ばけもの全員は、「生まれ変わりの説」を完全に信じている、という設定である。彼ら妖怪ばけものの共同体は、輪廻転生という仏教的な世界システムの内部にあり、これを疑

うことがない。独り悟浄だけが、違う世界線にいるために、対岸からこの輪廻転生システムを眺めることができてしまう。

すべての妖怪ばけものの中で渠一人はひそかに、生まれ変わりの説に疑いをもつておつた。

「すべての妖怪」と語り手が念を押すとおり、共同体内にある同調圧力の強さが想像できるだろう。しかし、その圧力に反発して革命を起こせるほどのヒーローになれない〈最弱〉の悟浄は、皆が言う通りに「自分」を「捲簾大将けんれんたいしやう」の生まれ変わりであると「信じておるふりをせねばならぬ」生活を余儀なくされる。この悟浄の生きづらいう二重生活は、〈異世界〉的な要素も含めて極めて現代的だ。「世界」への違和感が募りながらも、弱さゆえに相手を責めることもできない。そのために悟浄は、「なぜ自分は斯うみんなと違うんだらう」と、「自分」や「世界」について終わらない問いを重ねる思索癖が身に付いてしまう。無論、このような悟浄の鬱屈は「妖怪ばけものら」には理解できない。

また彼らは渠かれに綽名あだなして独言悟浄と呼んだ。渠が常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に苛まれ、心の中で